

白杖が感じた社会の素顔 ——単独歩行を通して見せつけられた社会のありよう——

日本ライトハウス盲人情報文化センター
水谷 昌史

はじめに

俗に言うところの感のいい盲人ではなく、年とともに大胆さをなくしつつある私だが、必要に迫られるままに、毎日単独歩行をしている。視覚障害者の歩行について視覚障害者自身が語る場合、一連の安全設備を要求するものであったり、生な体験談であったりすることが多い。論理的な思考の苦てな私のこと、私なりの体験や提案をどこまで整理することが出来るか分からぬが、視覚障害者の単独歩行の条件を柱にしながら、世の人々の視覚障害者を見る目を分析し、それを手がかりに幾つかの提案をさせていただきたい。

視覚障害者の単独歩行を可能にする条件として、(1)必要に迫られること、(2)正しい訓練を受けること、(3)人々の適切な介助、(4)点字ブロックなどの安全設備、(5)ガイド・ヘルパー制度など一連の福祉制度の充実、(6)盲導犬や歩行補助具の普及などが考えられる。なかでも上位5条件は必須条件であろう。ここでは行きずりの人々の対応ぶりや視覚障害者用の安全設備にみられる問題点を柱に、視覚障害者の思いと社会の見方とのギャップを探りたい。

1 言葉が出ない、手が出ない人たち

「街で目の見えない人を見かけた時、なんとかしてあげたいとは思うものの、どう声をかけていいか分からず、つい見過ごしてしまう」

こうした感想をよく耳にする。「よろしかったらお手伝いしましょうか」などと声をかけることは、いざとなると難しいのだろうと思う。しかし、そうした方法論よりさらに重要なのは、視覚障害者にどう接していくか見当もつかないという素朴な健常者のとまどいであろう。

事　例　1

この春、私は、晴眼の同僚2名とともにある結婚披露宴に出席した。それは、私などはおよそ場違いな豪華けんらんたる宴であった。会場であるホテル・プラザの人々が出席者の世話をしていたのだが、その人々は、最初のうち、「水わりはいかがですか」とかいった問い合わせを、私いでなく、隣の同僚にむかって発していたのだそうだ。私はこれに気付かず、「けっこうです」などと答えていたから、ボーイさんたちも途中からやっと私自身にむかって声をかけるようになったとか。こういうりっぱなホテルでも障害者への対応には苦労するものらしいと、その時悟ったしだいである。

ホテルでさえこの始末であるから他は推して知るべしである。買い物をする場合、晴眼者がそばにいれば、店員は私には話しかけない。喫茶店でも飲み屋さんでもそれは同じことである。いつも晴眼者と一緒にいるが、時には一人で、あるいは視覚障害者同志で出かけざるをえないこと、あるいは是非ともそうしたい場合もある。当然、視覚障害者が利用出来る店は限られてしまう。勇気のある人、感性の鈍い人は、そんなことにはとんちやくせず、店員がどこにいるかも気にしないで「スミマセーン！」と叫んで必要を満たしたり、相手のとまどいを無視して言いたいことを言うことでいつのまにか顔馴染みをつくったりしていくようだが、神経質で臆病な視覚障害者が行動範囲を広げるのはなかなか難しい。

中でも最も問題があるのは飲み屋さんと医療機関ではなかろうか。

事　例　2

ある夜、私は全盲の友達とある大衆スナックへ行った。そこは、晴眼の友達とはよく行く店で、店の人ともある程度顔馴染みになっているつもりだった。その夜は、全盲だけで行けるかどうかやってみようということになった訳である。記憶を辿ってなんとかうまく辿りついたのはよかったです、店では見えない者だけが突然現れたので驚いたらしい。コップが空になれば満たしてくれるし、必要最小限な言葉は発するのだが、ほかのお客に対するようには話しかけてくれない。遅くなって出勤して来た店の人のさりげない対応にやっとすぐわれ最

後は楽しい思いをしたが、どうにも気まずい一時ではあった。

色々な人を見、色々な話をかわして接客のセンスをみがいているはずのスナックでも、視覚障害者が突然現われるとどうしていいか分からぬで結果として無視してしまうことが多い。もちろん人により店によるし、最初はとまどっていた人たちも慣れればうまく対応してくれるのだろうが、「障害者が現れるかもしれない」との心づもりのない所には障害者自身も、つい足を向けなくなる。

その点、視覚障害者がよく出入りする店はなかなか感じが良い。日本点字図書館のそばのルノアールという喫茶店など、ウェイトレスがさりげなく面倒をみててくれる。

さて、喫茶店やスナックならいいが、病院となると、ことはもっと深刻になる。

事例 3

ある大学付属病院に行った時のことで、腹部レントゲンをとることになり、技師が「奥さんも入って下さい」と言う。室内は不思議に思ったが、言われる通りにした。私は技師の言うままに姿勢をかえながら撮影してもらったのだが、写している途中で技師が、「ああ声の通りにチャントしはる、奥さんに入ってもらう必要なかったなあ」と言ったのには驚いた。

集団検診のさい、血圧測定をしていた看護婦さんは、私が前に座るなり、「どうしよう、分かるかなあ」と言ったこともある。手を前に出して下さいと言うことすら出来なかつたのである。

— 提案 —

視覚障害児(者)がよく出入りすると思われる店、医療機関、公共施設に対し、

- (1) この世の中には視覚障害者が存在していて、目の前に現われる可能性があるとの心づもりをすること。
- (2) 視覚障害者に対しては自分から声をかけること。
- (3) 言葉はおおむね健常者に対すると同じで良いこと。
- (4) 基本的な手引きの方法

の4項目を記したパンフレットを配付するか、出来ればそれらの店や機関に勤める人を対象とした講習会を催してはどうか。

2 様々な誤解

慣れない所へ出かける時はもちろん、毎日通いなれた道でも、視覚障害者はたえず行きすりの人の適切な手だすけを受けている。しかし、不適切な手だすけを受けてとまどうことも少なくない。

事例 1

飛行機といえば全日空しか乗ったことがなく、それもほんの時たまなのだが、一人で飛行機で東京へ行った時のこと、羽田に着いてタラップを下りようしたら、介助してくれていたスチュワーデスが突然身をかがめ、私の脚をむずとつかんだのである。下り口を教えようとしたのだろうが、一瞬引きすり落とされるのではないかと恐怖がはしった。これは一度きりのことだが、もう一つ気になることがある。全日空では一人旅の視覚障害者は窓際の席に座らせることになっているらしく、先客をどかせてでも私を窓際に誘導する。私は、乗員の動きを感じ取ってタイミングよく飲み物を頼んだり、おしほりを差し出された瞬間をねらって手を出したいから、通路がわに座りたいのだが、この願いはかなえられたことがない。

そういえば、行きすりの人の中にも視覚障害者の便利さや不便さ、必要なことや不必要なことについて誤解している人がいる。

事例 2

階段を上る時に手引きしてくれた人が上りきって島型ホームに着いたとたん、手をはなしてどこかへ行ってしまったケース。階段よりもプラットホームのほうがはるかに危険であることを知らないのだ。

幼い時からの全盲である私が晴眼者とを半分しか理解出来ないのと同じように、身近に視覚障害者のいない晴眼者が視覚障害者を理解出来ないのは当然だが、まだまだ自分たちは理解されていないと感じざるをえない。

— 提案 —

手引きのルールの啓蒙もさることながら、視覚障害者がどんな時にどんな手だすけを求めているかについての啓蒙は出来ないものだろうか。例えば

- (1) 駅構内で一番歩きにくいのは島型ホーム。

(2) 電車では席をゆずる必要はないが、空席は教えてほしい。
(3) 整列乗車の場合は一番後ろに並ばせるだけでよい(なまじ先頭になると人の動きをつかみそこねることがある)。
などといったことを箇条書にし、出来れば写真を添えて配付してみてはどうか。もちろん視覚障害者がすすんで街に出ることにまさる啓蒙はないのだが。

3 形式ばかりの安全設備

外国には点字ブロックや音響信号がないという。アメリカでは視覚障害者に声をかけ、介助する人が多く、その必要性がないのだと聞く。しかし、アメリカ人が日本人に比べて障害者に対する偏見がないからだとは、私は必ずしも考えない。7月31日、日本盲人福祉研究会が「視覚障害者の国際交流」をテーマに催したシンポジウムの発題者、田辺国男氏は、「アメリカでは街を歩いていて、気軽に声をかけてくれる人が多く、ずいぶん助けられた。彼らはたいへん話好きで、バスや地下鉄の中などもずいぶん騒がしい。知らない人同志がしたしげに大声で話し合う光景はよく見かける。日本に帰って、電車の中に奇妙な沈黙が支配する時、わたしはとまどいを感じた」と語っている。知らない人は話しかけない日本人と、そうでないアメリカ人との差が視覚障害者に対する接し方にも表れているのではなかろうか。さらに、このシンポジウムの3人の発題者が異口同音に語っていたのは、アメリカ人は自己主張が激しいという。障害者も積極的に助けを求めるし、健常者もなにをどうして欲しいのかと率直に聞きただすという。欧米人が日本人に比べて、障害者になにが出来、なにが出来ないかについて理解しているのでなく、コミュニケーションのパターンの相違、国民性の相違ではないのだろうか?

外国のことはさておき、日本のようなお国がらの国、人通りが少ない場所、障害者への偏見の根強い地方には安全設備はやはり必要だろう。

— 提 案 —

点字ブロックなどは、不親切な国民性の象徴ではけっしてない。国際的にももっとその有効性が宣伝されるべきではなかろうか。

もちろん、安全設備はオールマイティではない。それどころか、点字ブロックや音響信号、盲人用誘導鈴などさえ設置しておけば事たれりという姿勢さえ見られる。

事例 1

私の住む門真市役所の近くには音響信号があり、市役所の入口には点字ブロックがある。しかし、そこまで行き着く道にはなんの設備もないし、市役所の入口から受け付け、本館と別館の間の通路が複雑であるのになんの配慮もないで、たいへん不便な思いをする。偶然誰かが通りかかるのを待つしかない。

事例 2

大阪長居の身体障害者スポーツセンターは、車椅子使用者のために通路もトイレもやたら広い。それは良いことなのだが、視覚障害者にとっては歩きにくい。通路の真ん中に下肢障害者の妨げにならないような足ざわりの異なるベルトを敷く訳にはいかないものかと日々思っている。

事例 3

安全設備があるということは視覚障害者の訪れを予測しているはずなのに、実際にやってみると、まるでまともに扱ってくれない所もある。門真市立図書館はその好例で、子供とともに過ごした時間中、一言の問い合わせもなかった。

— 提案 —

安全設備を施すさい、その有効性と限界について関係者に周知徹底をはかってほしい。設置主体者の責任もあり、盲人関係施設の仕事でもあると思うのだが。

視覚障害者は、色々な物を目印にする。音程のくるった音響信号や単調な盲導鈴のかわりに鳥のさえずりやきれいな音楽や気のきいたCMや人工噴水の音などが利用されてもいいのではないか。また、昔は、地道と舗装道路との足ざわり、道端の草むらも良い目印になったものだ。点字ブロックにこだわらないで、芝、土、タイル、ラバー、鉄板などあらゆる素材を使って、安全ラインや誘導路を造ってはどうか。特に美感を無視出来ない盲人施設やホテル、地下街などは、視覚障害者の足に分かりやすく、見た目に美しく、ハイヒールの婦

人や下肢障害者にも危険を及ぼさない素材を用いるべきであろう。

歩行訓練士、視覚障害者、建築やデザインの専門家などが協力し、個々の場所に適した安全設備のありようを検討するシステムを作つてほしいと思う。

4 凶器としてのまなざし

以上、視覚障害者の単独歩行を通して社会のありようを見てきた訳であるが、是非言つておきたいことがある。単独歩行とはすこし離れるが、あえてお許しいただきたい。

事例 1

ボーナスをもらった数日後、私たち3人家族、年に一度のささやかな贅沢を楽しむべく、とあるレストランに行った。もちろん本当の中流階級にとってはなんということもない店であろう。しかし、私たちにはちょっとリッチな一時であった。さて、雑談しながら食事している最中、突然見もしらぬ婦人が娘（3年生）に声をかけたのである。「お嬢さん、まあかわいらしく育って、これからもうんとお父さんやお母さんをだいじにしてあげてね」—3人とも呆然、やがてどうにも白けた気分になった。全盲の私と弱視で白子症の室内、健常の娘という風がわりな家族をじろじろ見たあげく、去り際にその人なりの感動を込めて話かけたのだろう。

事例 2

このごろ克服したようだが、娘が私と街を歩くことをいやがった時期がある。皆がじろじろ見るからだと言う。

「視覚障害7月号」（日本盲人福祉研究会発行№96号、視覚障害者を家族に持つ人々の座談会）でも語られていたが、無遠慮な視線は障害者やその家族の心を傷つける。一種の凶器と言っては言い過ぎだろうか。

事例 3

ある日の電車。母子の会話。

子供： 「あのオッチャン眠ってるの？」

母： （声をひそめるでもなく）「ううん、ただ眼が見えはれへんだけよ。」

私はうれしかった。母親の障害者に対する教えかたはこれに尽きると思った。

— 提 案 —

障害児(者)を凝視しない運動を展開してみてはどうか。それがどれほど有効か分からぬが、公共広告機構などが障害者や難民、いじめ、親子の対話などをテーマに啓蒙コマーシャルをやっている。ちょっとクサイと思うが、ああいう形でマス・メディアを利用するのも一法だろう。さらに、障害者に対する接し方について、学校の教師や母親を対象としたPRを展開して欲しいとも思う。

むすび

中途半端なものになったような気がする。分かりきったことを言っただけという気もするし、言い足りない思いも残る。ただ、歩行環境をめぐる問題、世の人々の偏見について、歩行訓練士と視覚障害者たちがじっくり論じ合ったものを読んだことがない。いわゆる盲界はこの問題についての取り組み方があまいから、訓練士とともに論じ合う土俵が作れないのだろう。交通運賃の割引や安全設備の敷設は必要なことだが、それを自治体や交通機関などに対して要求するだけでは交通環境は良くならない。逆に、視覚障害者を取り巻く晴眼者が視覚障害者自身の実体験を広く把握することも大切であろう。そして、その両者が論じ合い、うまく役割を分担して社会に向って働きかける時、はじめて歩行環境は改善されるものと思う。

私は、障害者と健常者の権利の平等、障害者の形の上の社会への完全参加はありえても、厳密な意味での完全平等、完全参加はありえないのではないかと考える時がある。それだから、不完全を少しだけ完全に近づける努力が大切で、そのためにも視覚障害者が街に出るべきである。凶器としてのまなざしかわりに率直な言葉と柔軟な手を差し延べられればと思う。盲人団体に、福祉施設に私たち個人にそのために何が出来るか、まず話し合ってみることを提案して筆をおかせていただく。